ところざわの暮らし 今昔 ⑩

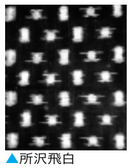
機音は冬の音～うち織りと賃機織り～

第二次世界大戦前までの衣服は、ふだん着もよそゆきも和装の着物が中心でした。家族の着物を仕立てるのは女性のつとめであり、古くはその布地も女性の手で織られたものです。女性たちは、農閑期の冬季を利用して機を織り、着物を仕立てました。自家用の機織りは「うち織り」と呼ばれ、織りあがった布地もまた「うち織り」と称されます。また、着るために織ることから「キルッパタ」とも呼ばれました。

うち織りの綿布は紺無地や縞で、これらを家着や野良着に仕立てました。また、養蚕が盛んな所沢市域では、蚕が作る繭のうち屑繭を自家用とし、屑繭から生糸を引いて白生地を織りました。白生地は、染め物屋で柄物や無地に染めた後、よそゆきの着物に仕立てられたのです。

こうしたうち織りのほかに、賃機織りも行われました。所沢市域では、明治時代から昭和初期ごろにかけて「所沢飛白」と称する木綿の紺絣生産が盛んであり、中でも山口地区には絣製織を業とする機屋が数多くありました。機屋は、農家の女性に糸を託して所沢飛白を織らせ、織り賃を支払いました。これは、農家にとって貴重な現金収入となり、冬場には、夜遅くまであちらこちらの農家から機音が聞こえてきたものです。その音を目指して夜遊びに出かけるワカイシ（若者）も少なくありませんでした。機織る娘のもとを訪れたワカイシは、雨戸の外から「こんばんはー」と声をかけます。すると、中からは「寄ってきなよー」という娘の声。雨戸が開き、しばし談笑のときを過ごしました。ワカイシの来訪は眠気覚ましになることから、親たちも容認していたようです。（宮本）

昭和初期の機織り風景


▲所沢飛白「繭に飛行機」

ところどころ 町内会めぐり

【所沢地区・星の宮町会】

～あいさつ運動で心の交流を～

星の宮は、所沢地区の南西に位置し、高台で平坦な住宅街です。星の宮町会は、市制施行と同じ昭和25年に組織され、現在に至っています。

町会では昨年４月に星の宮会館を完成させ、集会所としては市内で初めてエレベーターを設置しました。昭和29年に旧吾妻尋常小学校の校舎の一部を移築した旧会館を、多くの会員の協力により建て替えたものです。すべての面にバリアフリー化を図ったお陰で、今まで以上に会員相互のコミュニティの拠点として活用されています。

町会ではこのほか、平成15年３月に星の宮通りを中心に「あいさつ通り」の立て看板を設置し、あいさつ運動を実施しています。人と人とが言葉によって心の交流を図る大切さを再認識し、防犯・防災などに対する地域ぐるみの取り組みにつなげていきたいと考えています。だれもが自然に声を掛け合える、そんな地域づくりに向けて、この運動を星の宮から発信し、全地域で展開されればと願っています。

年間の主な行事には、蛍鑑賞会、盆踊り大会、敬老会、ところざわまつり、体育祭などが挙げられます。子どもから高齢の方まで多くの人が参加し、親睦を深め世代間の交流を図っています。

これからもみんなが安全・安心な生活を送れるよう「あいさつの行き交う街」づくりに努めていきたいと考えています。

会館と立て看板

街の写真館

▶キラリとした真剣なまなざしの子どもたち。「学びノート小倉百人一首新春かるた大会」で、日本の伝統文化に親しみました。１月14日㈯／教育センター

◀ニューイヤーコンサートにあわせて開催の「もちつき大会」。ペッタン、ペッタンの音が…。（撮影／市民カメラマン・西山元博）
１月14日㈯／市民文化センター ミューズ・大ホール前広場

▲１月号「写真コンテスト」優秀作品・「三富の畑で」。歴史ある三富の自然と緑を、いつまでも残したい（ご本人のコメントより）。（平成17年２月、下富にて撮影：下富在住・松岡幸雄さん）

みんなの広場

防災チェック

～防災士って、どんな人？～

子ども：テレビで観たんだけど、防災士ってどんな人なの？

お父さん：「自分の命は自分で守る」「自分たちの住んでいる地域は、地域の皆で守る」という考えから、災害が発生したときに素早く活動できる人で、十分な意識・知識・技能を身に付けた人のことだよ。

子ども：ふ～ん。例えば、何をするの？

お父さん：うん、学校や会社、地域で避難誘導や救助、避難所の運営等をボランティアの人たちと協力して行うんだよ。

子ども：そうなんだ。心強い人たちなんだね！お父さんは防災士ではないのに、どうしてよく知っているの？

お父さん：地域の自主防災会の人で、防災士になった人がいるんだよ。防災士は平成15年から始まって、今では全国で７千人以上の人が防災士として活躍しているんだよ！

子ども：お父さんも防災士になっていろいろ教えてよ。いざというときにどうするかを友達に話すからさ！

問い合わせ　危機管理課（☎2998-9399・FAX2998-9042）

はつらつ野老っ子（ところっこ）

～「一歩でも前へ」をモットーに～

高橋　保さん（小手指町在住）

「木を植える仕事をしたい」と願う高橋さん。14年間の中学教員生活に終止符を打ち、現在は、不登校などの事情を抱えた高校生の指導にあたっています。「無鉄砲な性格での転身」と語る真意は…。

中学の数学教員、野球部顧問として、何事にも全力投球の高橋さんは、厳しい先生でした。しかし、教員生活の半ばを過ぎたころ、「今の自分は本当の自分なのか」と自問。「本当の自分らしさを出すために」と、好きでなった教員を辞めようと考えていました。

辞める１年前に引率した林間学校のバスの中。自然をテーマにしたアニメ映画を観て、自然の大切さを強く感じました。「自然を守る」。この思いは、そこに自分らしさを表現できると感じさせ、違った仕事もしたいと考えていた高橋さんが転身を決めるきっかけのひとつになったのです。

生徒とのふれあいの中で

転身後、『砂漠地帯に木を植える』話の本に影響を受け、実際に中国へ行って木を植えました。植えた木が広がり、林となり、そして森になる。「自然を守るために、自分にできること」と実感したそうです。

木を植える仕事に就く機会をうかがいつつ、「社会に貢献したい」という日ごろの思いは“自然を守る”から“子どもたちのサポート”へ注がれたのです。学校に行けない子どもたちの心の傷をいやす。そこには、今までとは違った形で社会に貢献する姿がありました。

子どもたちは、海外でのホームステイや自然と関わる体験学習を通じて、自分の居場所を見つけ生き生きとしていきます。その表の変化を見ていると、この学校の存在意義を感じるそうです。「子どもたちには、成功体験をして自信をつけてほしい」と、温かいまなざしで語ってくれました。

『子どもたちの居場所を作り、大人への成長を手助けすること』、そして『木を植えて、林へ、森へ成長させること』は、いずれも“本当の自分らしさ”で社会に貢献する高橋さんの姿なのでしょう。

『一歩でも前へ』という生き方が、思い続ける願いをいつか叶えてくれるに違いありません。

誰でもエッセイ

テーマ　初夢

祖父の神社

南住吉・宮下　広子

元日の夕暮れどき。年末から田舎に帰っていた私は、買い物の帰り道に『山神社』の前にいた。気づかずに通り過ぎてしまうくらいの小さな神社…。

城下町であった甲府には、職業に由来する町名が多く残る。『山神社』とは桶屋町にある木の神様の神社である。

大工をしていた祖父が、古くなった社を再建した。時を経て死の直前、神社でのお祭りの晩に、「山神社のお祭りにたくさんの人が来ていたよ」と母が伝えると、大きな声で泣いたそうだ。自分の盛んで誇らしい時代を思ったのだろう。

小さな社の軒にある、ていねいな細工に目を凝らした。久しぶりに祖父と話したようなひと時は、今年初めての夢だったような気がする。

今だったら…

松郷・石原　晃子

夢の中では、父も母も若くて元気。息子たちは小さくてかわいい。華やいだ声で、両親が幼い孫たちと笑い合っている。「おじいちゃん、おばあちゃん」と呼ぶ声の愛らしさ。楽しげな両親の笑顔…。目覚めて思いました。「もう一度、あのころに帰れたらいいなあ…」と。今だったらどんな親孝行もできるのに。今だったら上手に子育てもできるのに。

お正月に息子たちが帰って来て、実家の母にお年玉を持って行きました。大人になっていく息子たち。老いても存在感のある母。それなのに、私はいつも後悔ばかりです。

時間は止まりません。後戻りもできません。「一日を心豊かに、もっと大事に生きていこう！」。そう思わせてくれた初夢でした。

再会

和ケ原・山ノ井　義治

今年の初夢は、なんと七福神だった。名前のわからない神様もいただため、その由来などをインターネットで調べてみた。七福神の夢はめったに見ないので、『福徳の正夢』になればと願っている。

見たい夢といえば、亡くなった肉親、かわいがっていたペットの夢である。亡くなった母が、その翌年の初夢に出てきた。語りかけたが、夢の中の母は静かにほほえむだけで、もどかしかった。

「また父母や愛犬に逢えればいいなあ」と思い、枕もとに写真などを置いたが、なかなか現れない。今となっては、夢の中でしか再会できないので、もう一度だけ彼らの夢を見たいと思っている。

初夢

こぶし町・髙井　寿子

夢には縁のない私。しかし、元日に25人が集合した我が家の一大イベントで疲れたのか、夢を見ました。

去年の４月、実の妹が75歳で病死しました。仲良しだった亡き妹が、末の妹と巣鴨の高岩寺の前で、私と待ち合わせをしていることにビックリ。「お姉さんは、毎月必ずここにお参りに来るでしょ。だから元気なのね」と笑顔で、そして「ファミリーを集めてうらやましい」と寂しそうな顔で話しています。ビックリして目を覚まし、キョロキョロとする私。

半世紀の間、私は毎月お参りをしています。亡き妹が、「巣鴨ならきっと逢える」と思ったのか。そう思うと、涙が…。

「彼岸、現世ともに元気で」と、亡き妹が好んだ香りのお線香を焚いて、逢えた喜びをかみしめました。ビックリの初夢でしたが、夢も楽しいかな…。

次回のテーマは「成長」です

▶「誰でもエッセイ」ではテーマにそった投稿を募集▶はがきに300字以内で▶文章は添削あり▶掲載者には記念品を進呈▶次回のテーマは「成長」▶締め切りは２月７日㈫必着▶住所・氏名・年齢・電話番号を明記▶送り先：〒359-8501・並木1-1-1　所沢市役所秘書広報課「みんなの広場」係　◎Eメール（アドレスa9024@city.tokorozawa.saitama.jp）も可。